新 刊 紹 介

IRVINE, D. E. G. and PRICE, J. H. (eds.): **Modern Approaches to the Taxonomy of Red and Brown Algae.** xii+484pp. (The Systematic Association Special Volume No. 10). Academic Press. London, New York, San Francisco. 1979. £ 26.20

本書は1977年4月に North London の Polytechnic で開催されたシンポジウムで発表された18論文を集めたものである。紅藻と褐藻を対象とし，種々な分野の研究者を集めている。47名の参加者のうち，37名がイギリス人であるのは主催国であるから当然のことであろうが，他はカナダ，ノルウエイ，フランス，オランダ，アメリカなどであり，大部分がヨーロッパの研究者といってよい。

まず BONEY がこの群の藻類の分類学に関する歴史的概説をしている。これにつづく3篇，すなわち，BLUNDEN らの藻類（緑藻を含む）の haemagglutinin とその分類学的意義についての論文，PERCIVAL の多糖類，および MACCANDLESS の細胞壁成分からみた化学分類学的な見解が述べられているものは，最近の化学分類学の分野の全体をカバーしているとはいえないようである。

それ以後の論文は用いられている技術や方法も種々雑多である。EVANS らは寄生紅藻についてのこれまでの研究の概観をしており，GUIRY は真正紅藻類の胞子嚢について，その分類学的意味を検討し，ここで彼は Palmariales を正式に提案している。これは光学顕微鏡レベルの形態学的な仕事である。MAGNE は細胞学的知見の重要性を述べている。電子顕微鏡の利用を中心に扱った論文は2篇あり，DUCKETT & PEEL は透過型，GARABRY は走査型の電顕を用いた研究を紹介している。特に走査型電顕の利用可能性は今後の研究に期するところが多いであろう。CHAMBERLAIN の無節サンゴモについての仕事は新しい技術を用いたものとはいえない。

RUENESS が扱っている紅藻の交配実験は，まだいくつかの群での試みがあるのみで，今後大いに発展が期待されるところである。PRICE の生態学的アプローチ，PRUD'HOMME VAN REINE による Sphacelariales についての数量分類学的アプローチ，PANKHURST & TITTLEY による褐藻のコンピューター査定もこれから試みられるべき方向の1つであろう。RUSSELL は褐藻の形態と環境との関係，FLECTCHER はイギリス産 Ralfsiaceae について述べているが，技術や方法の新しさを感じさせるものではない。ROBERTS の *Cystoseira* 属内の種分化に関する見解はあまり説得力をもっていない様に思われ，*Myagropsis* 属を *Cystoseira* 属に含める意見は一寸認めがたい点である。最後の論文は CHAPMAN のコンブ目に関する実験分類学，数量分類学についてのこれまでの研究の要約といってよい。

通覧して，話題が少し拡がりすぎている感じもないではない。しかし，新しい技術・手法の導入はこれまでの研究に刺激を与えるものであり，その意味でまだ有用性が確立されていない段階でこの様なシンポジウムによって意見を交換することは，今後のこの分野の発展に極めて有意義であるし，また参加できなかった多くの人々には時宜を得たものである。ふつうこの種の出版物において発表論文に附随している質疑応答が加えられていないのは一寸物足りない。印刷も大部分は鮮明で読みやすく，索引も親切である。　　（吉 田 忠 生）

新 刊 紹 介

HELLEBUST, J. A. and CRAIGIE, J. S. (eds.): **Handbook of Phycological Methods: Physiological and Biochemical Methods.** Cambridge Univ. Press. 1978.

近年，藻類を用いた研究は生理，生化学分野においても盛んになってきている。Journal of Phycology などは上記のような説明科学の分野からの論文の方が多く掲載されている現況にある。

そのような時，当ハンドブック・シリーズの2巻目として1975年に企画された表題の1書が刊行されたことは時宜を得たものと言うことができる。

内容は7編に分かれ，それらは微細藻類の細胞器官の単離，化学分析，酵素，光合成・呼吸と代謝の過程，栄養生理，イオン輸送，代謝阻害剤となっている。

代謝生理関係以外の一般研究者が参考にする可能性の高い，化学分析編の各章は，色素蛋白，核酸，蛋白，炭水化物，リピドと脂肪酸，カラゲナンと寒天，アルギン酸，フコイダンその他の分析法から成っている。

この化学分析編以外では，微細藻類についての方法が大部分を占めているので，多細胞藻への応用には改変が必要であろう。試料の採集などの，フィールド技術については続刊予定の内容に入っている。引用文献は比較的新しいものが多い。ページ数は各章当り，平均10ページ，最頻値8ページである。

価格は £ 18.00 だが，前巻と同じく，米国藻類学会々員には割引があり，£ 12.60 となる。参考のために述べると，直接個人注文をする場合に自分の振替口座を開設しておけば，外国振替は送金額に拘らず200円である。

次回刊行予定の第3巻目の表題は Cytological and Developmental Methods となっている。

(赤 塚 伊 三 武)